

竹久夢二の挿画を表紙にした映画館も！ 国立映画アーカイブ所蔵の映画館プログラム 5,682 点を公開



「映画遺産-国立映画アーカイブ映画資料ポータル」更新のお知らせ

国立映画アーカイブが国立アートリサーチセンターの協力のもと、国立情報学研究所と共同で開発したウェブサイト「映画遺産-国立映画アーカイブ映画資料ポータル」に新たな資料が追加される運びとなりました。

本ウェブサイトのオープンに際して最初に公開した映画機材（撮影機・映写機）の画像・データに続き、今回第 2 弾として公開される映画資料は「映画館プログラム」（当時の略称は「館プロ」）です。

★「映画館プログラム」とは

大正期から昭和初期にかけて、全国の映画館がそれぞれ原則として週刊で発行、その週の上映作品や次週の予告、劇場からの告知、映画ファンの投稿なども掲載し、観客に無料配布された冊子「映画館プログラム」は、いま日本映画史の調査研究において非常に注目されている資料です。従来の映画研究は作品の分析や映画製作をベースとした歴史の記述が中心でしたが、現代では「日本の観客はどんな場所で映画を楽しんできたのか？」という視点から、娯楽の最大の拠点であった映画館という場所の探求が盛んになり、「映画館プログラム」はそのための格好のリソースです。

★国内で初めて「映画館プログラム」のコレクションを大規模にオンライン公開

国立映画アーカイブでは 20 年以上前から、映画資料収集家の故・御園京平氏の旧蔵品《みそのコレクション》の中から、「映画館プログラム」の膨大なメタデータを集積してきました。また 2022 年度には国立アートリサーチセンターの協力により、その一部となる約 5,974 点のデジタル化を行いました。それをベースに今回は 5,682 点のメタデータを公開、うち 4,449 点については全ページの画像を公開いたします。発行時期は 1910 年代後半から 1940 年代前半までと幅広く、劇場所在地は東京の浅草・日比谷などの映画街をメインに横浜・浦和・神戸の館も含まれています。「映画館プログラム」をこの規模でオンライン公開するのは国内初の試みですが、今後もさらなる公開を進めてゆく所存です。

本サイトで国立映画アーカイブが所蔵する資料をご覧になり、多くの方が映画の歴史を深く知ることができるよう、今後も改良を加えながらこのサイトを育ててゆきます。ぜひご紹介いただきますようお願い申し上げます。

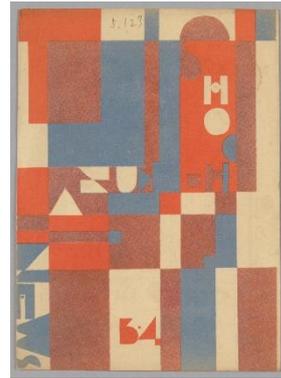
サイト名	映画遺産-国立映画アーカイブ映画資料ポータル
URL	https://nfajfilmheritage.jp/
新資料公開日	2024 年 5 月 29 日（水）16 時

新しい公開資料の一部



ニッポンカン・ニュース 1号

東京・浅草日本館（1923年）。関東大震災の3か月後に「復興第1号」として発行されたもので、「倍日の御声援御愛顧」を観客に訴えている。



SHOCHIKUZA NEWS 5巻4号

東京・浅草松竹座（1930年）。抽象絵画のような表紙デザインは、大阪・東京に共通する当時の松竹座グループの高いグラフィック感覚を示す。



MUSASHINO WEEKLY 14号

東京・新宿武蔵野館（1932年）。1920年の開館以来都内有数の高級館として鳴らし、この時期は後の映画批評家岩崎昶も編集に携わっていた。



芝園手帳 通号 85号

東京・芝園館（1939年）。竹久夢二の挿画を表紙に採用した号。後年の閉館後には『絞死刑』（1968年、大島渚監督）の撮影がおこなわれた。



三宮小劇場ニュース 72号

神戸・三宮（1940年）。1930年代後半から全国の都市部でニュース映画の専門館が流行、この館では『大相撲日報』を連日上映した。



東横映画劇場 361号

東京・渋谷。戦時下の1943年11月発行。前線の兵士への慰問の献納封筒として再利用できた。防空演習による休場も記され当時の窮状を示す。